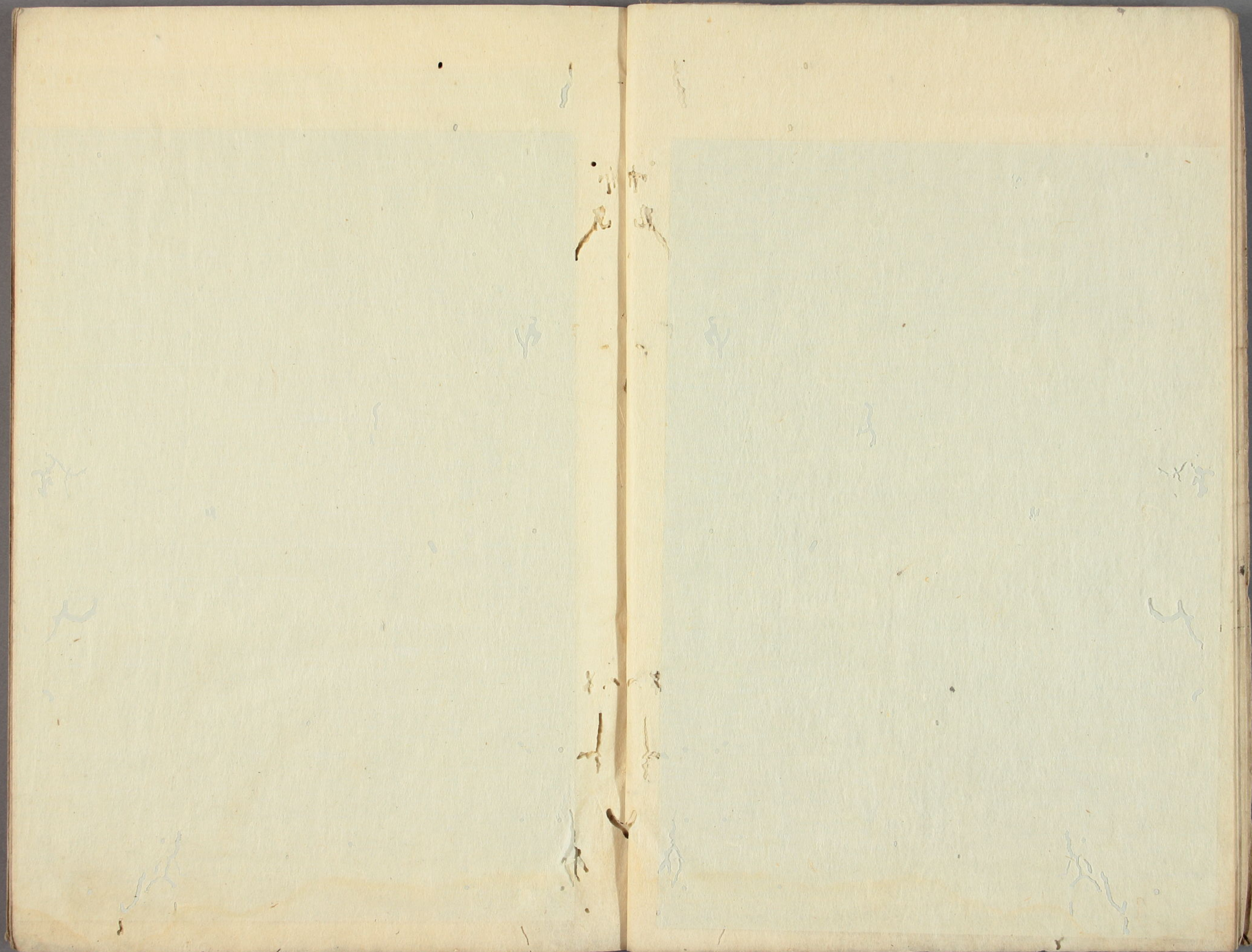


佛
送
冊
卷









初學の人々へ爾條々

凡人として喜怒哀楽ありと云ふは花を月雪に
感動の情なきものなり。乾坤造物者の靈を
れを以て草木の生るるも黄令の光るも
花の眼を以てむる自我の妙にして花を以てつく
しうれを以てこれに之の風流風雅といふ
云々を誦く七情はかそ^{父母}の教を以て天地と
りて自を以てこれに之を以てより利俗よりそ
んじうされて日月よんを以て佛の光を以て

秋の月よ草園子と備てあつても佛の極楽の
黄令世界へ通すはくのみふふいと一諸天神祇
は子孫繁昌七難即滅七福即生の禱との
も持て元旦の想の月おふ十五夜の月も十六夜
はふけは長あつとつらん喜に蒔秋は
はくはるまゝの悟もさつらん顔はは樂し
と見ると路のふと雲を塗ものたつて今世の
さるのまゝの産おるしとも又いふ世の宿は
の争つて今世の福徳といふはつらんほせ又

かりあつてはるゝ等しと看取人とくにも
いそれたまはく蒼月の情あつもの凡俗といふ
争つと別な者ものことこれを知んよと詩
の二通文學よとつれをいふことつるる
らめ家法つ分の二通文學は回を信を係乃
要し詩は漢土の歌和歌は我朝の歌として思
の感せしめ人倫とわると古今集の序文の
人倫和をこれと圓土徳とつるに云ふの宝器
として空をひるる地はする寶といふとも歌

いさるゝふし其かゝしけあはれ詩と知といへし
流信の北車言靈百詠の圓よせれはのつゝ口よ五七五
の詠ハ起居初移行住座叶よれと述を
活弁の道よたよりて教を受けて学よれ自得
ある五七五と歌とほく理てゝ多ふ事協し
歌としてゝゝゝふへふ何そといへそ
芭蕉花鳥月雪の風情より後海ものこそと
いせも歌としてとす紅柳をさくされこれ
これゝゝゝことゝ忘といへ詩と活し心と
辨る

ふれいふゝに凡雅をゝとて詩言水よす
蛙の聲よゝも人よ人の靈よゝと
凡雅よゝふ者人歎意味と知し
物詩哥乃詩知とりよも文字よ味く或ハ業に
ふれゝ寸陰を失ひむゝく道るあり或
詩ハ文學たゝく詩ハ地下の器よちゝるもの
歌道と名は神話の道のと名の怖る人こ已
ん口意よ今の自ら有はあゝ思とのあま重く
口惜し下事よもるや 註に連歌の亦あり略す

なまの流落と号するものあり例二百年来りきむしり
連歌の席に沉思禁情のありふと佳しと任せし
ことぬりの五七五よりいぢ多るとこはかしくよき口ずかひ
事よと席毎に二句三句云々種ふとに後一頁の
かゝるものとなりてしてゆくは次と流る
いらくを定る貞ともせた日に云やうしてゆくら
非とぬくこは何といふものぞんといへて連歌ら
初歌と父といひ初歌に流落とといふあり初歌といふ
ちれそ流落の連歌とも号して席の流落とすへし

少佐せしり伊勢の守武山崎宗鑑と云遠の祖と
して貞徳宗同季吟其外先哲ちうといへし
今芭蕉桃書的一家蕉門と称する程に流落といふれ
るは長りれ略すを口受

されそこも流落といふと文字の音訓よりい言靈の
因り生出るかよ人の俗談平話と云の己に具足せ
五七七五とつはこれ別初句に連歌といふも日女の
歌と遠ことなるむ然るそこも師よりて學ぶれは
ふねやいそんいつきの道といふも教たうてえへし

かゝ詠話とてしむまきとそめふいひりてハ詠言と違ふ
事ふ一巻と習ひて三つ々五七七五ハ詠とてしむ
あつすや貫之の娘のいとけりて詠とてしむと
詠とてしむやふふかめやかふらや詠とてしむ
いひ一これハ父母のいそせや忠多のいづれの御代の
上皇といふさうてつとせよ一詠とてしむ一御時(雲)とてしむ
妻こんくたまれ小書とてしむの小書とてしむとせ
ゆるるしとて又二つ々の角又まきとてしむの
まきとてしむこれとてしむもたそふとてしむとてしむと
てしむとてしむとてしむとてしむとてしむとてしむ

小女小童の小唄詠りるハ詠とてしむとてしむとてしむ
とてしむとてしむとてしむとてしむとてしむとてしむ
月に雪にふりいふよう別とてしむとてしむとてしむ
五七七五とてしむるれそ自然自問自答の断落ありて
印字そふいふ是父母のまきとてしむとてしむとてしむ
とてしむとてしむこれかまきとてしむとてしむとてしむ
七ハとてしむとてしむ圍棋とてしむとてしむとてしむ
これをとてしむとてしむとてしむとてしむとてしむとてしむ
者とてしむとてしむとてしむとてしむとてしむとてしむ

發初と師として言説はいいふれてに書子の業
及ぶとるしと人としてとるにあらはれん
るうらん學てとるしとるふらんや
くいとふれて春秋の表なるや、
よふいとの人む幸今世といひて
少歳とく云ふれをいそきんや
いれと今といひておふい
師またいふてといふ面
とくといふ寸人ありこれホをちひちの守苗

大樹と成の理は流る長老の諺と云う人あり
これとてとるよ木の生これとて哲人
了ぬれとる人あり
又云歌連の人より詠諧は近代のし
のといひ詠諧はとる茶の代
入多るやといひてとる物あり
天地變化といふよ人の云
和歌の語といふとる歌連の内
詠諧と名をいふれ言書の言に云

ふふふ我数年云控し句々皆辞せたり
けは病中の吟へ旅へ宿てまをを極せたりけ
めくまをせしそよふ辞せしとくよとて後
岡ロー始いしとそ

一 又考り化うるものに甚るる廿五條と云傳書題書ナリ
後語ナリ

け神よ或同といひつ何のよあよする事を答云俗談

平話を巧きんかふ世俗談平話我若是と説ハ俗談平話
と正んんら多メと云事ナ一朝一ヌの

論し亦別つくすへくしとては世書の眼目は是に詭諧といふとの
本立とふふれをわくくるとよこし神口よは事をかせるも
も色 化者深き意も教も有ふよと説人の味を也

同人の味を也

け事遠て一紙して
非論すへ

發句と云事とレカへふ事

一 け事ふ神の人をあまりにけりるゆへんを

字多し 諸學口りへ入る秘事ありとの世者
よくし山口のいらふ事とたりて異なりハ

いとまうと云ハ詭諧ハ連歌ハ徹しものにして一巻
連綿と脇才三より奉句と云つゝあるその序
緒るれと連句續句のふに在る其極もホたれと

句のなりとありふとつねへ一なる連句の合とせざる
時四季の感偶一物に應じて云あるし發句と
よふとあはれと連歌詠の一句と出るより
必脇の句を傳るるに脇の句を傳るれとよふに
歌ハ三十一文字句ハ五句として一ととして上下
の三句と二句とあるから一首の片ワれの三句
と又片ワれの二句と合て上下一首とするに
歌一と二句として紅らるる一首と一首とす
くを傳るるや一首とよふハ五句發句と

一句とよふハ三句とよふへ一獨を名は月と
おし應じて一句の三句の成就のといふこと
歌の一首の五句の事なるれを一首一章と
がしよふ昔なりとて一首とて人と年と
人、歌句といふいつれもつねへ一とよふ
ものよ書を極るといふよりつねてよふ
不叶事ともなり候受

各句一體之辨別

無一おの中の一氣起るこれ不造化原
感偶して句生寸句他んとするより之句白
とおお感一感動するものいさつと句白
これと業よ入とりふ句他といふ句白漸いより句他
とらふ句他とす時或る新古の風おまの
古風なるものはいくたし拂捨てた新風よ叶
はんは新風といふもの凡俗の形他あり古の云はれ一とあり
る凡俗情の形ありしことある事
新風漸いより句定る定る培又はり不易の境

不易一時流行
事余紙辨

和方二十神は傲て句一神は
扁席題曲流皮肉骨悉具足寸神ふ由時及る
よあり改選く可辨之幾句の業よす一つは
事と業の一條いふこととらふこととらふ
扱まはれゆへ入るといふこと切まはれゆへなるもの
そといふもの十八切字と負定るもの一と切
十の切字たてし切るはゆへといふもの十の切
切にまぬたといふもの二十余韻の仮名悉切ま
といふものこれ不ろとれを協はぬといふこと也

別條より取り替へ

志つれそ是發句一やとりつもの著用の事よあは
れとも月言を流し已に、お料にふひきのさ
かよ事よあす強言付校習にふつむ時よ
ある吟口とつぐまし世神のふちいほよあひ
遊ハ一のまんくに流きよだもれ諸事これに
てふるるさしあよりふく後借に俗流ま話流
俗に取ふれを先少とりふよ時の元言月雪は
山はゆき水青雲お霧の従身虫歎のよよ

憐しに付校もあひもあつる理かよと心取
廣くさとして五七五に函る事何そむつよ
事やハある古代のをいひと連歌よまされぬやに
とろよ是悟して説言とく入るへあつこれに
ふ狂よ語もいりあてあつよよと
つよいいて後をかへ父母兄弟の中よハ
いそれぬ事よいひつれをいひとそよ
たつあつといふ談笑もあつよよと
歌の祢義の編よといとあつよよと

志多へ——古代のそいつの訛言をいふと入されえ
そいついふすといふも古什ハをいふ——は
芝哲ハいつれといふとも連歌師ハ連歌師ハ
も連歌師ハ随分ハ執事して能カトといふハの
談笑ハ遊ハレ——事ハなれそそ流の人ハこれに
乃こんをやしてといふせしものなれといふ
非言——といふこ芝哲のんち連歌師
まうれぬ極上といふ——いふもて訛言と
いれらま——こ今難波ハ京師トよとにまゝ

あやう、然とそりていふハ貞徳流トより宗因の
なういふなりトといふハ古の流ハいんこ
そ式こそ事ハこハ貞徳宗因の格式とちき
いへしハ底ハ蕙麻といふ事ハ底然
たり流ハいなりト事化ハ随分ハゆりこも
あらんけりとの末流ハ事ハの事とすもめこと
流傘。新式。をいふ上ハのこくまされて松橋ハ
神楽のお牡丹ハ事と極なれそ事或ハ事のお
二事よりいふものふとハ事ハ事ハ事ハ事ハ

乃らちハ胸ふそらてなひ入へ玉縁のうへ失ものこ
一乃乃五七五く指折かよめ志とてもたひひく
へよよあはば古人の教に四季をよまき枝をよこ
分て春なる乃乃らん枝をさやうにいけさくくろくと
姿とあはれいー況まをやに葉へー枝をいかに
情ふりゆきおあられふもくとしていけし志とや
に句能へーといふ事あま至極のまよこを
たかるしよー

一是木の神のよし事よちいぬみくを枝るくさ梅

さるふらそさるとら木世をけ身いとめよとち
お梅くくさるのくくと斗首枝かよひ葉に況
とくくとも一おのこのな情をほくせん又さよは
といふあまさうよい題の景お世里といひ歌よ
さほものよと横といふ又歌よめ合よせ合おといふ
ありたといふを梅よる歳といふ葉にコニヤク
言ふに茶指これホーかきいひい斗も有
このしちる
くのち
これよを合の妙といふる

古伝の例を披—古奇本記よあひさめり寸は
恙致^たと増—対入業之時は法お—威せ—ぬ
よ—しち—も言—かき—は眼^ま見^ま園のおよて
業^まおよ—と寸^たと—

言の端てん^れを^つ略^れい^う

言り^は法^すす^ま—^ま言^ひ神^言引^ひ

ま^つふ^ふ—^ま言^ひか^のよ^もる[—]

言^まを^枯る^中乃^ま言^ひた^らう^らう

又あひ入てり

く^らひ^寸の^めを^運—^神言^引

言^らう^か—と^息する^山路^を車

言^まる^めく^れ—^ま言^ひか^のよ^もる[—]

言^のま^てい^ひま^て—^神言^引

末^二ち^ハり^ハり^ハ春^初住^居—^まて^の吟^せと[—]の^ハ

言^の神^言引^のい^ろる^ん—^はを^か—^ま言^ひか^のよ^もる[—]

年^の心^よう^のと^く—^ま言^ひか^のよ^もる[—]

言^の神^言引^をふ^さい^て—^ま言^ひか^のよ^もる[—]

言^の神^言引^をふ^さい^て—^ま言^ひか^のよ^もる[—]

そらとすらしのたれそらうきしとくれしと
きしといふべきはこれといはけしとらぬよと
まめぶヶ板の句は涼く涼く来てあくと云おしく
別言造化おと向て一そ一帯とよせる事よすの
ふねちうぶねこの人先おと感偶ふくそめ
おとつけてよま句して師ある人と涼ある人と
涼の慶羨よあつらん存るもの事もおとらん
先立しのも名園お欲らうまうさゆ故有情非情
の鳥歎竹木と感しと物とを誉賞歎して

そものごと俱に戯つらう樂むといふ事に
ふつらふれを却て吟口閑句の文もくまらふはだ
いてくる有り随ふらん秋のちやうふ理居てく自
然の真ととりめて面ふくもなやふらふと秋も
して花鳥蝶を巻てやるへといふやうはの事
なくいひいつれ句心ま逸あるものことはいひ一
句くよけつるハそハ詠諧の君子るん秋外地
よりりてハ人茶ハおして笑いとらり死うしめに
そつらうめとうけ口惜しとあふらふ廊とちうて

後、秀地と云てそゝの恥を巻よそく時の
うれしきよるこそいふくお情のゆゑと成る
事あれそ友同士といふも競ふし又よきなり并
句論はすへいふ慢の事論は慎へい
お情のことと書ゆゆいし其れを思へてあくと
吟しえうては魏大業のよハ

うらむすや十日過ぎては月一杓

書にふくと息する 且うる

け日再業の峰山路外と折れ山路外を
情涼

一 柳葉よいふりけ合し合せの事神心は柳柳を葉する
に柳く柳くと斗詠業一括しうと詠白
越意のたやすくうむへくとあはれ 耐経情はる
るへい先柳るそ柳の姿をよとくとととと物
きて柳柳と書ゆの内より 答や二つはつ噴あす秋
よりそや書ゆの谷うち出る事去きうとさうり
おのいひり書るよとあひいけ柳の野とたのい
くの心のいこくてまのうちよさせしと理し
うつこいよと葉とつあをよとつけてはよはの

月の二日三日四日とあひつすに睡をとりぬ
園も又よーなとれぬつけさぬくんとあらし
お葉してきてといき、お白化意いしん物も
うきしきと沉思するにうきぬいっぬれを言
もぬほし臆し園も庭月も梅よそかに姿情
ふれそいらう化してきても多くのせぬまう
るま時ハいふふとのうく乃云さー古と斗う
己うの己うく古とあひつすの
おうにんねへな事有る言を

一ッばく音を含り 栞のこ

とソバくハくしとさうくばやふれと一ッばくを
のけてこれる己うき一ッばく一ッ白のまう
一煉しせぬくとえへー道く白化して導く
一ッ葉よ廊の円廊の外とソバあり栞よてい
色香も臆し園も庭月も敷も朝も隣も栞通ふ
廊の円廊の外と右廊の外とをとりあて
部向う化をたてる事一ッばく 栞の香に二音
栞の苑とス置栞語馬 牛の策小原女
これふの
栞のり

いっせうと有へ— 準て忘へ— もろくの題名もど
け事をつけても云来許六の論あき

お又、け合とり合よて業もふよああり— 主歌と
受のよ偏へ家さるふ句を服の句を業す歌
こ〜の持て句作せよとのつら強白のまもの
なり大勢のまなう— ちとそ梅、香や 梅
とそやといふ五又や一句を受句とて二之の
七よ我脇の句として、の廊月廊外—
よせおつけ合おとておて脇の— 相對

おは遠所は苗けふて已り器量一といの
梅の香や梅さやにあ意の事お業— 舟て
えよかるすふのいしうけぬ— 句とちとるものそ
これとくもあまりに廊月廊外の中せものそら
業— くらめそふ句とせ— 梅香やも梅さよと
とり進して何の句、ちとめ事— 成て歌の好ハ
用— 成用、體よふるものこ— くりくふたていら
とく句数えはれそいつ、此梅梅ハ合意ゆ
とのこむつ— き事— ちとめ歌ハ

梅うまや乞食のたぬと配うはく
くまう香やけ一寸しと落のし

いんらんもかへくスでいけていけくらにんは
神学のそん悟させよ
あてしあふと歌をからして 一三三、五七五と
限のふよ崇一よとふ申連歌も詠話と二十
一字の歌を二人して一首地るころあれそ七五
の一そハ歌をとのふとて家業の七五五
下のふとんぼてふ他とふ申む極の教秘事
ハ肩毛といふ諺のころ久事の老や是亦の事
よいつそら辨ハあれと事長らきハ略ス遠く

執りの上自好する事之自好せしめ事ハ
成然の器よりすたと云へし

一句は十六篇といふち里け内より句の病のつ
あり 理屈 筈用 句の秘より 入らう 入る

これ有り申しし理屈と大病とす 一切の病を治す
句ハ理なるものに理外なるものに一處は推入する

其の事ふと氣に外の事なるは 理
は 云ふて氣にくらりと云ひは 理
は 準て云へし 然句を引て云すへし

句の理屈といふ事と辨す

名ろくや 蘇息云ふよりいふ

空に疎してもの初山を固るす

井の水の澄より表をさるる

ふ川より不二の氣なるは 澄りし

果てしを歸してなるは 燕

これふも 理の一處より入らるや

及句ハ理の感なるもの也 四時の昔あるとわに
立して感るや 蘇息云ふは 三つたといひ

蘇入てハ子の初やじとのを唯日用の理を以て
凡雅よん入へよ感ふ一理に毎晝の如に
してつまる事あらんや雲をたふと一く
水よ心をそきその取はほも乃、理を系らゆ
乃感情を産おほとの今日のをいつたふ此とハ
月をのちすう、成と二日月ハ細く十六夜と
急るうと争いそんハ天地の理よして前者は
いつくより有る生、理をいふ人よ、くちの人ハ
理を人よ、海を忘れらんのごよ、さ事、
(

いんや凡雅よおめて用ゆるにたんや只の
理をいふく、縁をうとなく、を、サのく、
す一理よ、なるむこと、ふ、れ、を、

此一條十六篇の教を、そ、ち、ま、に、
下、の、理、を、と、過、く、ん、お、て、い、ん、

兼利ノ合攝といふ事
物事のなるや、ちん、この月
葉乃、居る、一、む、二、や、お、な、
し、欲、理、を、い、れ、て、遠、い、あ、う、口、あ、ら、う、
意、を、い、れ、

一考の爲て、多少をたのしむる事也

花の強し、古人の意し、ふとは家の一、之とを言ふは、
家の字、詠するに、貫之業、平ハ句、詩樂、天も
意しといへる、句、つと、我の字、慢心の見解、といふ
るし、草花ハ、同、雅の命、ふれ、を、若し、要し、て、日、の
詠、詠之、結、全、濁、ハ、全、と、り、て、ハ、骨、れ、る、瘦、腰、と
あ、つ、の、一、枚、の、蔬、と、つ、き、て、と、月、家、の、俗、句、我
た、の、し、む、を、自由の、場、度、へ、か、く、あ、ひ、お、ち、や、と
き、く、ふ、し、ま、さ、る、不、ふ、り、ひ、て、と、若、し、と、詠、也

五、之、字、之、昔、昔、喰、て、草、花、と、い、う、あ、ひ、て、あ、い、つ
く、句、の、ひ、り、り、ハ、有、へ、一、又、能、く、ふ、と、化、を、う、し、と
え、分、り、と、り、ふ、ら、こ、ら、の、詠、を、り、凡、雅、の、理、器、口、こ
ら、を、知、れ、る、人、の、遊、遊、し、と、云、お、へ、よ、云、舞、う、ら、ひ
多、ハ、西、川、意、法、の、詠、よ、て、も、知、へ、一、え、解、や、る、は
有、へ、く、し、ひ、年、の、言、ハ、世、を、造、れ、る、も、俱、ハ、天、悟、の
氣、よ、つ、ま、れ、て、一、初、に、と、か、さ、さ、る、ん、つ、ひ、を、と
一、西、ハ、希、き、風、と、り、て、つ、お、さ、よ、る、と、つ、さ、の、詠、ハ
あ、き、よ、る、唐、市、中、ハ、隠、は、ま、し、よ、器、ハ、凡、は、り

いふいふいふいふ人よまきれよ年の善と云付も
たふりーくれ ちのち先ぬのりこちを樂む
又いやーこちのちとして ちのちとこつ
いふのちとして ちのちのちといふこと
慎へ玉一也これよつけていふまはる人のち

妙の家の煙の中よ タケ 神塚片田

とふちいふちあるふ道教なる人けちを
いふ源のち 加加貝 半化直
いふ源のち 加加貝 半化直
いふ源のち 加加貝 半化直

いふそ我ちすむ妙とい言位言はるに
ちよとくい任有はーよ本よのまふち
る已三すとして 甚門の凡調ふと弘む
世人をたふすふ罪人こびるー

俗事 徒の事の句を論事

え日や人のんもそのとさ
いふくといふちかちす思ふ
静氏の氣のさうわ八九月
いふ積ふふとちまき雪丸

たの常の事よ〜〜^た従事とい〜と用ゆる時ハ
句となり用されも他することと入る廿年の揚也
ついやすとし砂と蒸〜して経〜する、又功をかく
〜して愚〜あそふとり小場は遠〜遠ちうけらる〜
送へ教人多〜

争やこらの喜〜も二三あん
あ〜歌やこらの喜〜も二三三ツ
植ま登の自慢てえするは〜

温冷ハ時節の情〜して気と気ととあるハ姿也
有情非情風情風声水音しと感る不〜う〜と
あり愛と感〜一葦の二三三ツとん入るおの
世の中乃る〜一極ま登の自慢てえする
市ハ〜と感〜
お通〜句とんかて〜とすへ〜

右外〜句の昔、俗事な言、
お目場、お場、
ぬく場、常の形地、
お放場、なと云、お事

あり神人の句の病を急時とたしく仁換ふの
り塵うらむとつふとも句とつふ事の形と
傳ふ也或言人の減術を習ふ師とたうて
十四經絡と殖うるはくくかふや二目の
書はうてる事不能いつとこれ聴同
するとも量るうんと師と云日今日より家ハ
禁穴のを説くしえ病はれ禁穴多にそん
ろく玉要穴を河せしといつこに鍼さすを
寸分に遠いにからさハ誤るうん禁穴を

是て除くそんころと禁穴の三習て終に
妙辛といふと諸學の近道之を句乃
習もしと西女之忌へふ事さ一寛うん
能ハ能て有ん今つふ句の病うと
除くそ云おるふとの句あす寸といふとも遠
し

自三つ三の句を定らつた事

凡風雅を天地の中の風として人道の雅なり、
凡雅を志士凡雅人とす、俗と人、異り、凡雅は
人とあの人、凡雅人といふ、こゝをいとあやしくれ
き、故に、卑貧富にとも、凡人は人にたつて、俗
と凡雅とす、詩、書、連珠、藻、翰、香、道、茶、道、の、歌、
弄、ふ、人、は、凡雅人と、そ、ゆる、詩、書、翰、香、茶、
と凡雅の器物也、と、思、ふ、則、遊、ふ、と、い、ふ、と、也

心風雅ふしよれを凡雅とせし心凡雅の體に
して器凡雅の用之け林の心凡雅の味い
つくに名園家款の多を風雅乃器と稱へるの
を銀の貴と厭ひに奢に驕と極ノ累の家貴
を心風雅とすし許されし居士衣をまとい
雅名を号し別名をいけらるし已せより棄く
まじらるるに我々世推人と号して風雅三昧
と他の食と掠る者ありこれ亦乃人行を風雅の
人よあらん新といふすら人能識むの風雅と

是し伺も傳るこれ亦の事と承いえても心あは
人の知へも事なれとふの一事もはきまぢんと
たりふらるをせのふし外は吟口の主なるを
神人の人を導たしうもいふ也古今貫之君の
席よも人のうらを種として多の云をいふ
たれ里々同真名席に詫心地發其花詞
林とあるもこれなり先をいふせんかひなく
日用の用の心を除心を衣鳥凡月遊し
つてて感偈する物よんといれておの自

詩の五七五にゆるくへー

已と已う句をえこと父の子を觀し等々ん
父と已うすとすふも父とすふも子の意を
くまされてハ境のこゝのふもくく三和伯がま
事よきくとおひふ已う句と已うるも
これまたうひましく人嫌の已とあしよと
かりふ人を掃して句も又えりこれも神
心と却てせふ落きものこ執柄のかうじに
えううじ句他もよ安帝に切者うらふがうハ

及ふとするふとの句よしくと自讃自慢入
生るるひいこれ已う愚よらうされえ已う
分料は不着の誤なりをのれう句の已と
うまやうふもこ執柄のたうされハたう
人のえうはるてううこのうこえこえこく
句はよしあしいえるもすへきうえゆるといふま
それも已う力の分限かとあうてハんこぬもの
たうたし一切者うらうも已う句の家執ハ
しよふものそそいっふのこにかきうん詩号連

このも傳るよこもこそ新陳争論、獨銛のまらひ
乃例も傳教款連よと宗通家おはして争論
と諒るこふりもあり詭譎いま蕉家一風連款
者流の傍よすむといへとも蕉家なくたり
信じてそ流ふのいくなるも末梢の
藤のこく乱て誰花のりしつことのもぢ
とうし非なるし云りれるこれ蕉翁の風
我慕り、翁の諸門人、説ふれし條、を
或ハ傳ハ或ハ盗てるりともあらひハ翁の

骨肉よけ入言才の句々といふも翁の許され
一被群逸なるを搜控ひ學てそを飛濫
として廣く是く諸學者の切あるものに
たよりつめて習ひまねふより亦執行地ま
あつたといふ切なりといふとも已に元り已に
頭をなほ人の師とするよる書師の半學子
にも不至といふことのあれをかくる人を師として
そ人の半學よもふよハさうハ何ようハす教是
予、おさよりのらうけたりき予原と

學いしもの四人あり、蓋翁いへる事あり、家身
又人の師あり、各道に聽けしを得ていし、
んが傳ふし、なしと、んをいつてんをほくふ
し、んこころの師と名のたを師のよく撰へ、
下り、これそり、蕉翁とそし、つまい、むせ、古折の
逸人より、師なり、群、教へ、道と志、
ハ今日、至と、少、年、ひ、と、り、す、子、と、学、ひ、
事、な、し、家、と、傳、ふ、人、い、く、ら、た、り、も、社、子
信、友、と、し、て、そ、つ、と、い、ふ、も、お、傳、へ、ま、し、

事秘をせし事なり、又、秘、かくすへ、
事、な、し、と、ま、え、な、し、と、
和、之、ハ、日、本、の、宝、器、よ、し、て、神、代、よ、し、て、神、代、
傳、り、人、丸、赤、人、家、持、業、平、小、所、の、化、現、を、そ、し、
貫、之、ハ、初、恒、代、の、歌、仙、と、そ、し、た、て、ま、つ、
あ、家、三、家、の、法、宗、通、家、
い、ふ、と、も、こ、れ、は、從、ひ、死、女、の、免、許、と、下、流、者、流、
あ、れ、と、富、緒、川、の、流、級、と、菟、波、山、の、ち、り、ひ、
を、捨、ふ、と、も、こ、れ、を、神、と、し、て、蕉、翁、を、い、ふ、の、同、祖、

作へよもの何人そち武家道なりとや幸に燕の
下官をかとりふも徳らむ謀雲のこゝろ 翻
名を田舎の浪とりにあふはそゝめて世に
正風を記し始て歌道のそゝくれと 凌
年 樹百とせ今うけ時よあへは再蕙風苑の
二月果の葉月キカラキの等しゝるゝ意義の句は
さいとりし志ほりとりふ事とあつたとせし
學者ありそたゝてさくく已と定くまよ
をい新清の境よりつゝて邪正を辨へよ

あり 詩いよ日本よ竹馬といへとも杜子美李白
を我詠諧を桃青其角ゝゝゝ 學者は
ありすや

おこつ句のふのれと定るゝ得はとりふゝんを
あゝ述るゝゝゝ凡流は備後句とりふ事も
あゝ云ゝゝゝ是即切字もあゝいふゝゝゝ并
別紙に教ふゝゝゝん好句他をゝゝゝの姿
句のゝゝゝ語法のほゝゝいふれとす

山里ハ 美草一述し 枝のむ

仮名を述つくすへよや一首一句分と大切の
ものも正しくしつゝおひめくすへよも如術と
えんきよ也 けいばに別て世を看んとすむへし書目の眼目
句者といふしちまうよ口の事をおてうたぬおこ
一 無言一語一詠といふもの治定と教と自と他も
見と聞との外なるとんを存念すくし死と
實と姿と情とけ二つのお乾坤昼夜陰陽
一 備こ一音一詠の靈と靈とたす大切の
主人公鬼神感應のりくえへよるり

然も自他の境よふはなしてハ叶さる大事も
先自といふ事一身一己の思意ハ煩悩くく
下ハと凡を釋經よふしねふといへとも人己
一身の思意ハ際限分析う限ある一方の思意
とて雲ハ天文地理とさとし一 天竺道土を量
知といふも凌羅萬像無量無盡の造化お
いらにすてうおのひよは述言といひ課へよやく
おひひく考へよ要目也 けいばに世書の鼻口と
ソをへしを口受
他といふ是ふと大切の事ハ各一 釈教弥陀誓

願の内他もが致とや事こそ凡姿凡情よけて
あつていと有りてふ方便あるへしそれいかに
りふよきより定ト疑ト花ト實ト見聞トの二つに
あつて造化物を心と感偶として言語よこそ
凡姿凡情其景色と述頭寸これ自より
他と心のふふこころ悲情の草木と物といふ
世有情の鳥獸虫畜にば夢の谷と云
叫ぶるこれを自として他と感動せし
むるとはりふる自他と用として他は自と

體と寸に時のうづらうづら月花を除去
を暮れ執の情とのへん人々一己の思意を
と述んとするもいうて余情凡情の歌ハ
れんや

かくてそ氣をわけてる体うづらわさすといわれ
こころをがらぬころくちるハ形中の水とを
秋葉の下葉よきふつや曉の曉のぬきさかそ
へふと古今の序は有りておひをおよるら
らへてこそ余情も余姿もゆるるらん

言ふつづねえさかんとまいつそりの姿を云と
述もすん家相句をりよりまきな短
ものたれそ実と氣と世女と情を傳るに
挾より昔より教るよ香の世まうにおり
解ても秋とあつひいそ風姿よく
たふるよいづらてい忽我として情をのつ
傳るし事深さとのハ必きよ風姿をい
凡姿全うれそ風情を中よ有るよくは
句よ此して志也

一 自己の句意あり自我の句意あり聊して
己よりと免る事と己ハ有限とくまり度
天地と動すよたす自我ハ萬物の自然の
理りヲいふれそ子眼一致とをふれて四海に
溢るたそへ縮妻の光をいふよいるまうおを
えすると他よ自の意を加へて縮妻、物に
見事とといふぬハ自りといひる也縮妻、おを
ゆるとえんよお濃をゆる自我の眼を
けつとさとして十とさとせ箇一燈、

と下るといふと燈ととのふりやるといふ日を
と知る——此後書身意と云へ——
をよこれとあ——ふける時ハ云ふるといふを
言語の文則一の一の極意一の化ありと申る
といふをよ——ていろくよ曲第ありやといふん
そハ一冊よよおとびて酒をよよ人の言こ

稿書やいく交こせても一ツ松
いふらやいくととんゆるも一ツ松

一 おれよと云へ——そをよよの言の端の口を

一 凡是等の辨ハ一詠一章の心極と云ふも
直道こ土臺こ

元日小田毎の日こを意こられ
え日や何よるとこん物あや

こゆるの白うちきく言よあはるこされも一を
の歌白たえつるこ一あえ且の想の詞よ横雲の
たしよよう 万葉詞朝日 朔夜の顔あはれ一年の計を
鶺鴒のけ日よう天海月の月ふぶ顔つこも
との事ふあひそるに信濃始終山に

中秋十五夜田毎に十八坂、新あまきうつる
とりふ本説よりふりひりをつよてけ日けり
うよ新日のおと比しての田毎にけ日新お
そ又類あしり敷くの田のうき^水いじうつ
してえうよものと限ふよ既至と合ふ
一句の上はた何となく田毎の神日も又意
し多れとりふ也いかに余姿情景曲ふ
いふんや次り
何にたえん新あまきうつることそいカ葉

新ひしよ漕り船の泊るさうこととりふ何よたと
へんのことそ計をうりてふと春の曙の言
新カよ盡されぬ敷色あはは何よたとへんと
いふあふ云外いさうりの凡存情こりり者と
すやせくの歌仙も春の曙の歌ハ景曲よと
としてよまほうよと一終ふ
春の曙の言新人といふみよとあいなむは
とよまほふとそいづれといはれしとら
るん古二句よなつへ準て志へ

一 景物と業して情とのそと入句あすゝ有

神一やあれふくと世一ちれん

ふといふ句ハ下子の辭よさるよ一かうろか句乃
感情とのそとそ之の義一淋しきゝゝ露の凡昔
ふと世一公羽を賣ありく似せ蕉のたにこはて
翁の句法さいとつひをありとりふもあゝ思もの
結語あり一のそとそあゝ強信一似れそ句意
あそく 端せし

ちる人は世の過るれと一一生時をくらひたれよ
徹てふ又一生一鳥とくらふは下略

一 一くそぬあゝら 佛一智ハ思

殺生ハよ一とそ莫の因を喰ハぬハ佛の戒ふれハ
こハこれけ戒よ一とそ風流よ一うてゝの景お
をくそぬハ佛の志 ぬふと一あゝはのれハの
風雅とさむと一うといらん 一と佛一智ハぬとハ
りふこ け一とよ一ていらん

凡部とりの款も不可も一題の風流詩よを言
意はして思をのふとを要とす 一を一露の句
神鷹の夢よ 一とてあれふと一と世一ハ有、

家からそむにと已を殊勝の寸これとん乃
祿をうりやくとりふは雅と奇情と知人乃
酒上と右ユ〜 歌の神ノ紙の西山に
紙て田の西水倉里及ふ夢のそらあられ
天ばさうけ里ぼりて人の関ノ夜を我
はく心

神ノや獲ノおまそ夜より
ふ雲ノ夢の遠さノ粒ハ厚 其角
そつ厚や山へくそを地おたふ代

酒買に坊、雨痕のノ一ツ
神ノめ、夢やハ月林日あまう 一音
これふの外いさるもちまきさよふ已う少き
分限を〜して無盡乃景物よ〜め愚昧
とやいそん 次の厚食ハ思の句ハ願ハる
と並ての句よあ〜はさ〜略くそぬとりふに
微て代せ〜雑詩の句〜雑の句とりふ〜
是ホ〜厚くそぬとりふを體と〜
厚無用とせ〜也余とこれノ準て忘れ

雑紙と世尊の訓也の語へ

一 古くは古語の二つを亦せしむるなりふ姿を考へ
せよと云ふも古人の教ふが句一句生せを
口より発せしむる句を吟し語路の通るは
云々へ云々云々して云句は已の眼に
聞ふ喜心憂ふも句を吟し云々
句と觀てて句の意速くは教意せし
語句は一化して云々は鳥の目目し
為の肉多る眼中に忽と給ふ字し

ここの語ちりれを別一句持多りと云ふ人こそ
大ていけ教のこゝすれと十句に六七句は
云已し云句に定ると云へ

一 句生して右のこゝら知人しけ句ハ
何處の處もくいつこゝ一句の心姿情は
少時新くと速に答へよ覚悟を云ふ
一 句一句ハ自問自答のものもれと人問は
已し已し云々一句自問自答て見るへ
一 夜いきてふと目をして折るほとふの

一夢に感て始て一句ありよの拙さうして
硯川にせよとの或ハムよそんしおぼろ
あつるまよふやせしとわい夜明を反を
よも語んとうれしくたてるも夜明く
おれをんれそち時感せし不とうるん答の
せし悔くものこ

夜書くもの厚さよ時々 涼筆

けうに家一ふひ師としておぼひせし涼筆の
句ここれいうにとるれそち一夢よ世をせし

めいふ乃申よ雨の音もかへしなうふ有明
の影の富よきうこしる凡情も忘れされそ
ちん其句の光とありてあつたれよここ
し其句よ其凡情のをろそくに詩を足
らん自問自答も語路のきくへも素はして
自の己解のこにして未凍るれをあしたに
え答はことりや

一云手抄といふもの内う

鞍三並よ小坊と兼や入振川

りふもあつては畫ハハカレ餘ハイヨトと訓るれを目に
てんふよりいふ像と言語よこれをイロトリ
心よほえて言語よこれをハカリて句と
して一首一句とす

或時翁よ絵の讀好を老あり其餘はうたふ
事の赤裸よ木槿の花をかさしめは圓あり
翁とつては座よ寶を書好ふ其句

花よ槿ハハカレ事のかさしめ
けうよて一とてて百千とさして餘は句とす

句ハ畫ありとすよいふは念ま世絵を見よ
裸童り川岸よおりの花をむしを居るひや
とあつそれの絵の思ふるへふとこうきことあつ
ぬふい子り炎天もいとをい畫乱に瘦子の
つらひもさきよは念もの且よさきて夕に
るはを木槿かさし遊ふこれを地よしそるる
時よ目よ其がうしふををきて心の無なる
速るんよは觀想すへしこれ嘆羨嘆自に
け絵よ姿のあつそれよまよ一句るはよきてい

るはうとくいん名人の心をききし一紙
一章ふれてそれより文何とくいんやわ
人言官それとも強てほ望あつそくの紙
ふふとしく編のころより一白七人
又嵐雪、画る朔月にまよふ

朝白き下子の女さく衣し

とてやくそ生の情事話と其まくに句と
一讀し女さくふりつりす
又ほく坂野ある人竹々そとふ花筒

を秘あすこれハ兼春梓のささめらうく
減て肌ハそのつら木賊むくのまゝとひ砕
しふと滑しえもえいそれぬ西ふきものごと
よきほりし切多きこれより着の襪をき
ふれハ裸重しとちかまを飲の一句るうね
風流風情のあつてハ時ハお

昼寝よまつき涼せ憐し

うれそしめしうあれハ一句凡俗情あまを
日盛の度場よ一日まつく男のあま日くら

イハユキ説
イハワ訓

炭竈やそろりに馬乃吹

すまゝはや烟の果のいつあは

雲ハわけの五句已他おもん時各くふのれ

ふのいせふれて甲乙わらふ〜かゝる時と

これを己う句として見る〜欲あう他人

の句として已判者とあり〜欲とをふ

念よ云〜の候くの智とことく〜心とめて

これをわつて〜ふれと辨論して〜書

凡炭竈ハち烟ハ月あふ〜て種々の語意ハ

其角ハこ

述ることにして炭焼の独そあらん竈の際とも

煙ハゆけと様ハ夢^全とも名も思主^全後山^全とも

鏡の語ハ鼻ハふら^全ともねおまらとい〜も

遠くあふら〜とのそま〜経白たて〜句を

よ〜句

一、句 設えは句烟の日毎く〜互凡景を所縁

るらららの名田の法師、觀相せ〜化聖の煙

らちやすらふいよもあ〜とい〜よおひい

せま^全烟の日く立のほろハそれ〜も引落

學の道、此論していろ其景校條措との
ほふい學、こゝ系末、すしり校、しりり本殿に
まゝり右多りしも、梅の友情を、知事、あつり、
其梅の女性、知、梅、は、さ、ら、梅、と、梅、と、
と、梅、は、さ、ら、梅、の、生、立、根、
と、え、え、へ、其、根、本、知、知、を、て、校、系、と、
つ、も、も、連、こ、こ、り、梅、へ、い、お、神、心、と、
し、ん、と、系、と、し、て、白、引、す、る、味、さ、ら、
ふ、れ、諸、道、秘、事、あ、つ、能、信、し、秘、事、ふ、し、と

り、ふ、と、蕉、翁、の、心、裡、風、骨、隠、逸、し、ら、か、ら、切、
して、他、門、の、ま、つ、ふ、事、こ、え、り、も、秘、事、
敷、り、き、り、ふ、系、不、及、と、い、へ、し、も、翁、の、こ、ろ、を、
と、能、こ、後、の、盟、談、と、梅、の、凡、志、の、厚、と、
ふ、そ、し、ふ、し、の、事、ハ、信、之、皆、是、秘、事、こ
そ、可、く、こ、背、事、ふ、し、最、下、し、て、皆、人、の、不、信
ハ、不、可、覆、學、ハ、ん、と、お、り、ふ、今、日、の、志、不、信
ふ、し、人、心、の、変、化、い、う、に、う、す、へ、ふ、梅、自
後、世、ハ、後、日、後、世、の、論、し、し、日、も、照、西

も浮へ〜今日のよ〜論ふ〜と〜
伝存命あ〜を 傳へ〜

一 不易流行の弁別 元一時流行の論 格式祓 常の形

俗争の論 倦場 せく場 句、苦ミ

未来と再句 手紙放場 景曲、論

人情句 心、句 一轉

是亦未 熟火のく〜傳へハ事 繁〜る月〜
却て吟口と句の禍と 成時と行て傳へ
さる〜惜〜ち〜す

一 虚實の論これとら好されそ不叶当用
されそ〜示之

實ハ體〜して不勅る〜虚ハ用〜して

自由自在の備ものとはなむを〜と

詭譎の句と手〜嘘とつく〜と〜教の

有〜述て虚の 虚とるる句多〜

實と虚 採ひ 虚と實のたのに人主

を〜して和説せ〜むと〜の虚之〜言あれハ

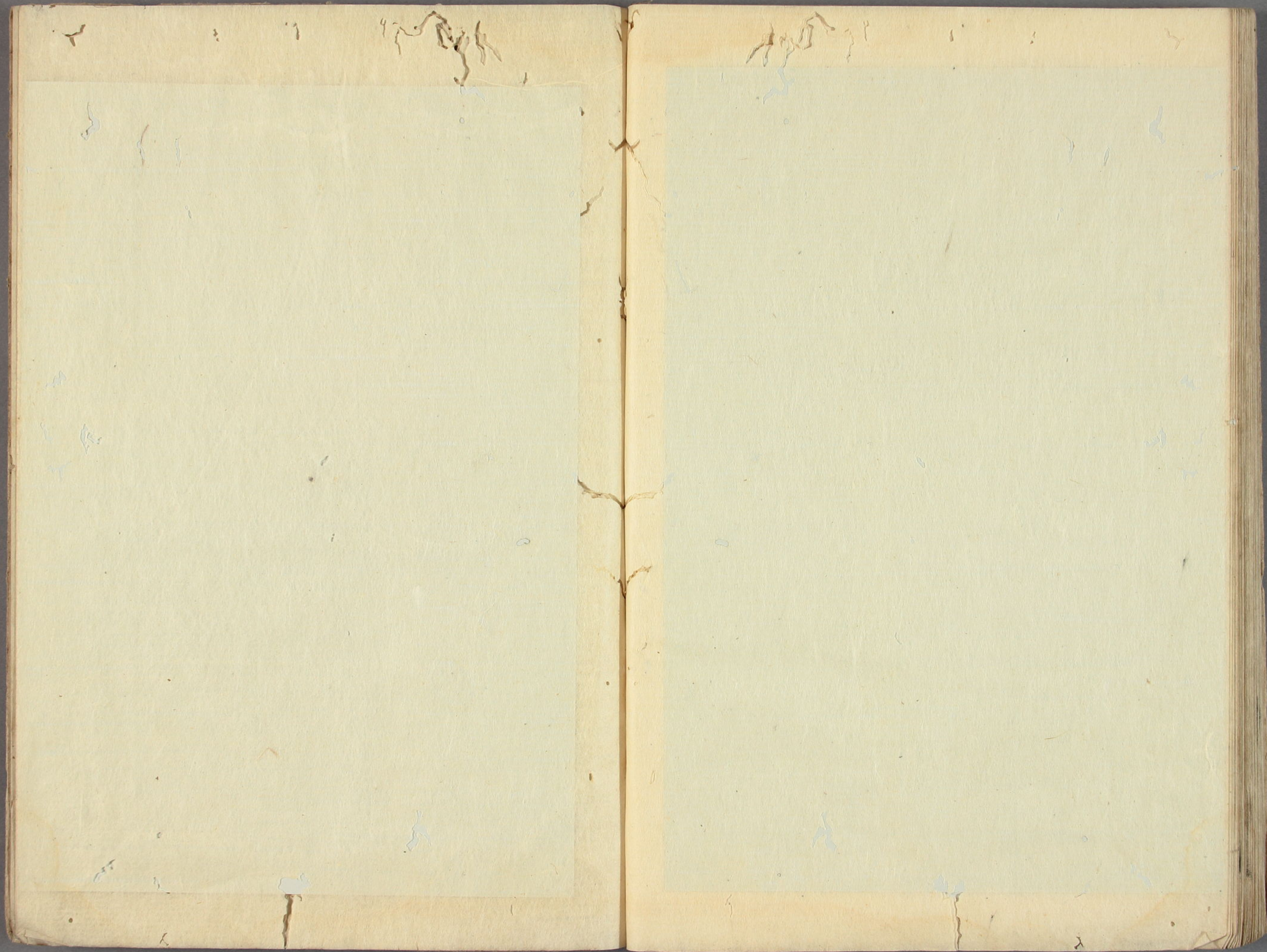
二〜る〜一〜月ハ實〜して花ハ虚る〜

虚よりして年く時を不忘ハ実之月と
言ふらうといへども留けけるあれを虚るう
二つどもに理之未れをいふハ理なきを
れを實虚一腑之これと云ふとすれ
ハ実ハ情よりして感之虚ハ念よりして
無より西ふきと別りふこれ虚なり知宗に
親疎あり親ハ実疎ハ虚よりちう一代
の欲仙疎より秀宗秀句ちうと示ゆる
花ハ虚るれと無よりてんうハのを有る

まであふいと念へり又人の夜話するにも
言の三よてはらうしうは俗にがとて
りふちう一とて言ふしげん様をい
て無より入これ虚のふりしれを之身乃
言といへる言にして後之時といへハ
ふのよやこれホ言ハ虚 虚ハ言るれ
ハこそくもふりしう西ふさしもふま
ふるすやだてハ句に

暮に初瓶とて世にいふ

鉛色の蔓の釣瓶よまといはりしうも水の
くまればおしうもかたはるまふよハ
これ虚之花といふ由へ水の汲れぬと
りふを實之をいふ歴くあつたれすハ
他の釣瓶よて汲るよといふハ理合に
して風流乃くの心よあつたる
たとへし引白といふも有るし半長
布れと畧書添すて ちへし遠くあつた
して其後乃る引くもとふす全とり



安永三歲

甲午霜月念日

寫之

福富芝秀

有美

